

再創造されたOSとOfficeが 新しいビジネススタイルを築く

タッチ操作に最適化されたWindows 8、クラウドやソーシャルとの連携が強化された新しいOfficeが、2012年度後半に立て続けに発表されました。

Windows 8



【タッチデバイス時代に対応するユーザーインターフェース】

昨年10月26日、「17年ぶりのインターフェース改革」というフレーズと共に華々しくデビューしたWindows 8。その大々的な文句に連なず、ローンチから1ヶ月で販売数が4000万ライセンスを突破。Windows 7以上に早い立ち上がり、世間の注目度の高さが伺えます。

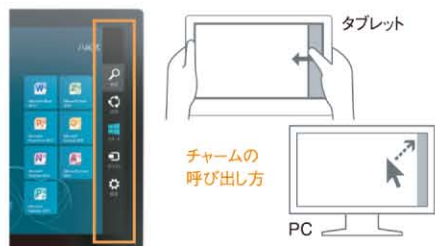
藤本恭史Windows本部長は、Window 8 開発の背景についてこのように語ります。「社会のトレンドとして、営業効率を上げる、CRM的な使われ方をする、またはペーパーレス化や災害時の事業継続性等を考えた時に、会社の資産を既存のネットワークのフィックスな環境で使うだけでなく、リモートな環境であってもそのまま引き継ぎ、どこにいても同じ生産性で仕事ができる環境をいかにご用意できるかが大切であると考えました。またご自宅のPCを会社に持ち込むBYOD (Bring Your Own Device) やご自身のスマートフォン・タブレットを仕事で活用するなど、企業内で管理する以外のものも含めてデバイスの活用が広がっています。これらのデバイスが、企業内のシステムとどう結びついていくのかという課題もあるでしょう。そこでWindows 8では、企業全体の生産性を向上していくことに加え、さまざまなデバイスを管理・保守できる運用性という両面を突き詰めながら、新しいタッチデバイスにも対応した快適なユーザーエクスペリエンスをご提供していくことが求められました」。

Windowsを「再創造」する 2つの方向性と多彩な機能

このような背景から開発されたWindows 8を表現する際、「Reimagined (再創造)」というキーワードがよく使われてきました。その言葉

の意味を裏付ける特長のひとつとなるのが、新しいユーザーエクスペリエンスです。

第一の発見は、パフォーマンスの早さです。ある外部の調査会社の検証によると、その早さはWindows 7の約2.1倍という結果が出ています。スピーディな起動でWindows 8が立ちあがると、第二の発見であるタッチ操作が可能なスタート画面が現れます。スタート画面に現れる四角のタイル自体がアプリのアイコンになっており、メールやSNSアプリなどは「ライブタイル」機能によって最新情報がタイル上にアップされ、ひと目で知りたい情報が確認できます。画面右側に表示される「チャーム」も、作業効率をアップさせるツールのひとつ。例えばチャームの検索ボックスに文字を打ち込むと、すべてのアプリに対して検索をかけることが可能になり



ます。このように、タッチにも対応した快適な操作性と、より少ない手順で最大限の効果を上げるパフォーマンスによって、Windows 8の変革の一面を実感することができます。

「Reimagined (再創造)」のもうひとつの大きな特長が、これまでの企業の資産を引き継ぎながら、業務効率を上げることができる点にあります。

Windows 8は、Windows 7と同一のLonghornカーネルをベースに開発されており、互換性が非常に高いことが確認されています。つまりWindows 7で高く評価されてきた管理性、セキュリティ性能、互換性などがWindows 8にはすべて引き継がれているということになります。例えば既存の企業内のネットワークの中にすぐに組み入れたり、既存のプリンタやルータをそのまま使うということが可能になります。また、これまでの業務で活用してきたOffice等のアプリケーションも、従来のデスクトップ画面で問

題なく使用することができ

ます。他にも、BYODに対応する機能として、USBストレージデバイスからブートしてWindows 8

の起動が可能になる「Windows To Go」(エンタープライズ版)、ブート段階からのセキュリティチェックや、Windows 7から継承されるハードディスクの暗号化機能「BitLocker」(Professional版)に代表される高いセキュリティ性能など、多彩なエンタープライズソリューションが提供されています。

Windows XPサポート終了に向けて、新OS導入の検討を

2014年4月のWindows XPのサポート終了を受けて、今、多くの企業が新しいOSの導入を検討しています。「新OS導入の際は、ぜひWindows 8をご検証いただきたい」と言うのは、寺田和人シニアマネージャー。「Windows 7で動作するアプリケーションの多くはWindows 8でも動作しますので、これまでの検証を引き継いでWindows 8を使っていただけます。またタブレットを活用する場合が多い企業様にも、Windows 8のご購入の検討をおすすめしています。Windows XPから移行するお客様については、Windows 8上でアプリケーション毎にWindows XP互換モードが設定可能です。弊社では「Windows 8互換性センター」とよばれるWebサイトを公開していますので、周辺機器やアプリケーションの動作に関する情報をご活用いただいて、既存の企業資産を極力活かしながら、Windows 8の新しいデバイスやエクスペリエンスをお使いいただきたいと思います」。



Windows本部 Windowsコマースグループ
シニアマネージャー 寺田和人さん

Microsoft Windows 8 / 新しいOffice

取材・撮影協力 日本マイクロソフト株式会社
〒108-0075 東京都港区港南2-16-3 品川グランドセントラルタワー

Office



【クラウド・デバイス・ソーシャルが開発のキーワードに】

タッチデバイスに最適化されたWindows 8との親和性が高く、OS同様にタッチ操作が可能になった新しいOfficeの全貌が、いよいよ明らかになりました。輪島文シニアプロダクトマネージャーが開口一番、「Officeは大きな変革の時に来ている」の言葉通り、これまでとは一線を画すさまざまな機能が採用されています。

まず大きく異なるのが、提供方法です。法人向けの新しいOfficeは、従来の永続ライセンス方式の「Office Professional Plus 2013 / Office Standard 2013」(MSI形式でのインストール)か、サブスクリプション方式の企業向けクラウドサービ

す画面右端によく利用するアイコンが表示されるなど、タッチに最適な表示、メニューに切り替わります。また、タッチモードに加え、ユーザーが指先で操作をしたのか、マウス操作をしたのかを判別し表示を切り替える機能も搭載。

クラウドサービスとの連携も強化され、各ドキュメントのデフォルトの保存先が企業向けのクラウド



ス「Office365 ProPlus」(クラウドからストリーミング配信インストール)として提供されます。さらにOffice365には、過去バージョンのOfficeをアンインストールせずに新しいOfficeが使

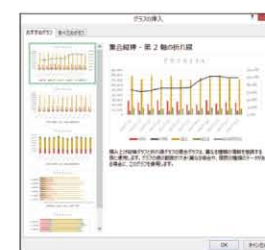
用可能、1ユーザーにつき異なる5デバイスにインストール可能、サブスクリプション形式契約期間中は常に最新バージョンが使用可能、といった利点があります。

Officeが人の操作をサポート 一層使いやすく進化

新しいOfficeに共通する新機能は、さまざまなものが挙げられます。まず大きな変化が、すべてのアプリケーションに「タッチモード」が搭載され、タッチ操作に対応していること。タブレットPCでもOfficeを快適に操作できるよう、タッチモードに切り替えるとリボンの幅が広がり、親指操作がしや

ストレージサービス「SkyDrive Pro」上に。また各アプリケーションを起動する際に自身の「Microsoft アカウント」や法人アカウントでサインインすることになり、場所に捉われずさまざまなデバイスで作業を継続することが可能になります。

ビジネスパーソンの活用頻度が高いExcelは、簡単な操作でリッチなデータ分析ができる新機能が導入されました。例えば「フラッシュフィル」は、



おすすめグラフ機能

文字列のパターンを認識して自動的にデータ入力力を補完してくれるという機能。クロス集計を行うピボットテーブルやグラフを作成する際、Excel側でデータを認識して最適なパターンを知らせてくれる「おすすめピボットテーブル」「おすすめグラフ」も追加されました。さらにアドイン機能として追加された「パワービュー」機能を使うと、時系列のデータの変化をアニメーション表示し、データが変化する過程を視覚的に確認することができます (Silverlight 5.0以上要イン

ストール)。

PowerPointの新機能も見逃せません。特にプレゼン時の発表者用の画面を表示する「発表者ツール」では、スライドのズームが簡単に行えるように。スライド一覧から離れたページのスライドを指定して、素早く表示することもできるようになりました。またスライド作成時には、グラフィックやテキストボックスの縦横を合わせようとすると自動的にガイド線が現れ、縦横の揃えが一層簡単に。画像などのオブジェクトの一部分の色を「スポイト」して別なオブジェクトに同等の色を再現する機能も採用されました。さらにスライドに「コメント」を追加、返信することができるようになり、レビューなどでのコミュニケーションツールとして活用することも可能になりました。

革新的な新機能が導入される一方で、すべてのOfficeに「Officeテレメトリダッシュボード」というツールを組みこみ、既存のアプリケーションやドキュメントなどの互換性を検証する支援も万全に行われました。互換性の問題は世界でも特に日本で課題として取り上げられることが多いため、このツールは日本に拠点を持つチームが開発し、世界に発信しています。

企業の高い期待に応える 新しいOffice時代の到来

さまざまな企業に新しいOfficeについて説明を重ねている輪島マネージャーは、各企業の注目度の高さを実感しています。「外出先ではスマートフォン、客先ではタブレットPC、職場ではデスクトップPC」とさまざまなデバイスを使った仕事のスタイルはすでに始まっています。さまざまなデバイスで作業する際、そこで利用できるOfficeがいつも職場で利用している環境と同じであることは作業効率化の重要なポイントです。クラウドと連携した新しいOfficeで、いつでもどこでも快適にOfficeをご利用ください。」



Windows本部 業務執行役員
本部長 藤本恭史さん